

フランスと日本における家族の類型化と問題

立川 信子

2010年1月末から21時NHK第一放送ニュースの中で無縁社会というテーマで社会的な関係が希薄になっている例を取り上げた後、『無縁社会－無縁死3万2千人の衝撃』（2010年1月31日『NHKスペシャル』、NHK第一放送）で孤独死の増加についての追跡取材が放映された。親族関係の希薄さ、退職後の人間関係の希薄のため、孤独死、遺骨に引き取り手がない例が増えている。また、離婚と生涯未婚の増加のため、孤独死が増えている。2030年には男性3人に1人、女性4人に1人が生涯未婚という予想をしている。派遣社員など不安定で不十分な給与の雇用が増加したことなど種々の理由で、未婚や離婚が増加していることはすでに問題になってきた。それに加えて従来ある程度あると思われていた血縁地縁に至るまで薄くなっている事態をあらためて報道している。

一方で、『ヨーロッパ新大全』（1990年）や『帝国以後－アメリカ・システムの崩壊』（2003年）など多くの著作で活躍しているエマニュエル・トッドは世界的な規模で家族論を基に社会の分析をしている⁽¹⁾。家族のあり方から経済のあり方を導きだそうとしているのである。トッドの分析は家族という要素を社会経済の分析の中で類型化した点でも、ヨーロッパの家族関係の地域による多様さを指摘している点でも有益である。その反面、フランス及びアングロサクソン系以外の部分、特に日本に関する類型化は2010年の日本にお

いては単純すぎるのではないかと思われる。または、フランス及びアングロサクソン系の社会に関しては2010年までの比較的最新の事情まで考慮しているのに対して、日本に関しては雇用の安定していた1990年代以後事情を充分考慮していないというべきかもしれない。これは日本が世界で大きな経済力を持っていた時期を対象として、それを一般化しているからということもできるかもしれない。しかし、2010年中国に経済力において順位を譲りつつあるとはいえ、フランス本国(552,000km², 60,700万人)よりはGDPの高い日本(377,835km², 1億2,747万人)を分析するには幾分単純すぎないだろうかという疑問が湧く。

家族とは何かは時代によって階層によって大きく異なる。ロバール辞書には次のように定義されている。「1（古い）（語源的意味）同じ屋根の下に暮らし家長の権力のもとに生活する人々（子供、使用人、奴隷、親族）、2（現代、一般的意味）結婚や親戚関係によって結びついた人々の集団」一般には血縁の近い親族をさし、同居している頻度が高い集団をさすと考えられる⁽²⁾。家族の形態は世界的な地域差だけでなく、日本国内でも地域差がある。また公的福祉にも地域差がある、東京都の住民が他の地域の老人ホームで焼死する事件はまだ記憶に新しい。ここではトッドの論に基づいて家族を見てみよう。

そこでまずトッドは現在活動中であり、著作も

(1) Emmanuel Todd, *L'illusion économique, essai sur la stagnation des sociétés développées*, Gallimard, 1998; エマニュエル・トッド (平野泰朗訳), 『経済幻想』, 藤原書店, 1999年

Emmanuel Todd, *La troisième planète* (1983), *L'enfance du monde*, (1984); *La diversité du monde: Famille et modernité*, Seuil, 1999; エマニュエル・ト

ッド (荻野文隆訳), 『世界の多様性, 家族構造と近代性』, 藤原書店, 2008年

(2) 家族の定義について参照, 立川信子『フランス系カナダ人のアイデンティティの模索－コミュニティの伝統と変貌－』地域創成研究年報第4号, 愛媛大学地域創成研究センター, 2009年, pp. 151-166

数多いが、ここでは『経済幻想』(1998年)におけるフランス及び日本の家族と経済の分析を考察する。次に、フランス大革命(1789年)以後のフランスと日本の文学やドラマに現れた家族の例を分析することで家族という概念を考えてみよう。さらに、日本とフランスでの最近の家族に関する事情を最新の居住と家族に関する統計、特に高齢者に関する報告から分析する。高齢者問題というのは家族の形態が端的に現れると考えられるからである。ただし、資料参照のしやすい日本の家族に関してはここでは簡略化する。

1 エマニュエル・トッドの家族類型と社会

まずトッドは次の三点を論じている。第一に、世界の家族を類型化することができる。第二に家族の構造が経済のあり方を決めている。第三に家族のあり方が国民国家のあり方を決めている。そして、この三点から経済と政治の動向を説明できると推論している。特に、グローバリゼーションという国民国家を超えた経済の動きにはむしろ国民国家のあり方によって異なる対応が見られると考える。具体的に分析を見てみよう。

何故家族が多様であるかという問いに、「自らの人類学的な基底の上に築かれたそれぞれの国が、固有の家族的価値をイデオロギー的な形で表現しているから」と考える⁽³⁾。

四つの家族原型を定義することができる。

絶対核家族。自由主義的で非平等主義的なことが、アングロサクソン社会の特徴である。そこでは、子供達の早い独立と厳密な相続規則の不在が結びついている。

平等主義的核家族が、少なくとも中世以来、フランス・パリ地方に支配的である。ア

ングロサクソン世界ほど早く子供が独立することが決まりであったわけではないが、それは、保証されていた。大部分のラテン社会に特有な厳密な相続規則は、兄弟達を平等に扱っている。

直系家族は、ドイツ、日本、韓国、スウェーデンにみられるが、権威主義的で不平等である。農村では、たいてい長男が唯一の相続人となるが、他の子供は、男の相続人のいない農家の跡取り娘と結婚するか、僧侶や兵士になるか、あるいは、他の方法で土地をでていなくてはならない。この制度は、家族生活・社会生活について非個人主義的考えを前提としている。人類学的分析により、その効率性が証明される。[...] 直系家族は、ヨーロッパ大陸の中央部および西部によくみられる。[...] フランスでは、それは少数であったが、本土の周辺部、すなわち、アルザス、ローヌ=アルプ地方、ブルターニュ、そしてとりわけ、地中海沿岸部を除くレングドック地方に多くみられる。[...]

共同体家族は、権威主義的で、平等主義的であるが、先進資本主義国の中ではイタリア中央部とフィンランドにしかみられない。

[...] ロシア [...] 中国で支配的に存在する [...] すべての息子は、結婚後も父親の権威の下にあった。(pp. 39-43)

次にフランスに関してはパリを中心とする地域と周辺部分における家族の違いを指摘している。

フランスは、アングロサクソン型個人主義的資本主義とドイツ・日本型の統一的資本主義とを分かつ断層面に位置している。中央の個人主義と周辺部の集団主義という、人類学

(3) 『世界の多様性』p. 54 この著作では家族類型の呼び名が異なっている。以下の引用は『経済幻想』による。「息子と父の密接な相互関係によって組織されている直系家族には今後は権威主義家族の名をあてるこ

とにする。家長制家族という用語は兄弟の連帯が無視されており、父-息子関係しか想起されないため、今後は共同体家族と呼ぶ」(p. 45)

的観点からみた二重構造により特徴づけられるフランスは、核家族と直系家族の二類型から生じる経済的・イデオロギー的価値の対抗、すなわち、自由と権威の紛争、平等と不平等の戦争を内包している。(p. 31)

その中でも、直系家族と核家族の教育的潜在力の違いに経済発展の理由を見ている。

アメリカを実質的に追い越したのは、すべて [...] 直系家族の国である。直系家族の特徴である権威と不平等という基本的な価値は、一子相続原則をとまっていたが、それは、前工業的社會では、貴族あるいは農民の家系を明らかにするという目的をもっていた。産業社會やポスト産業社會では、この家系存続という企ては、子の学歴に十分気を配るといふ形で再生している。直系家族は、日本では目に見える形で存続し、家庭内に常に多くの高齢者をかかえている。それはスウェーデンやドイツでは、[...] 両親と未婚の子からのみ成り立っている。しかし、これらすべての国で、子供を総括し、保護し、教育するという人類学上の制度は、強く残っている。(pp. 71-72)

パリ地方では、核家族が支配的であり、平等という特徴のみがアングロサクソンの同類型と異なっている。[...] ローヌ＝アルプ地方から南西のラングドック内陸部までの南部地方の大部分では、直系家族が支配的である。[...] 老人は核家族地域でもっとも多く独居している。[...] 核家族のパリ地方は、[...] 17世紀から20世紀前半まで、初等教育に関しては支配的位置にあった。その後1950年から1980年に、それは、南部、すなわち典型的な直系家族の地域に特徴的な現象として現れた。(p. 73)

「直系家族型資本主義」の特徴である投資のための高い貯蓄性向は、この時間に関する

関係の特殊経済的・会計学的表れにすぎない。貯蓄し、投資することは、未来に賭けることである。逆に、現在の消費に吸収され、負債の中に逃げることは、対の論理から、核家族の精神世界に起因する。二つの資本主義は、それぞれ、特定の人類学的システム－個人主義的資本主義は絶対核家族、総合的資本主義は直系家族－の論理の働きから生じている。(p. 92)

アングロサクソンの個人主義資本主義と日独の直系家族型資本主義の対峙は1992年にも言及されている。

アメリカやイギリスの社会生活様式は自由主義的で非平等主義的な絶対核家族の価値観から出ている。

このような想定は、逆にドイツや日本のような国ではほとんど意味をなさない。ここでは、個人は、直接的・局所的あるいは職業的社會環境に枠づけられた存在である。この社會統合は、明示的であれ、暗黙的であれ、直系家族の価値観から生じる。ここでは、諸個人が家系の構成員として堅く結びつけられていた。日本のモデルは明示的である。小企業は、むしろ家族主義的であるが、大企業も家族の代替えとみなされたがる。[...] (p. 13)

家族は国民という概念を生み出すから、家族の類型が国民國家の統合力も決める。

国民という共同的信念の出現は、普遍的現象であり、大衆の識字と宗教的信仰の衰退に結びついている。[...] 家族が核家族で自由主義的生活の基盤であるところでは、出現する国民概念は、原子論的である。イギリス・アメリカ・フランスの国民概念は、こういうタイプである。[...] 市民の集團の中に個人の自由な連合を見たがる。[...] ドイツの直系家族 [...] は、[...] 個人は、家族に属し

ているのと同じく国民に属している。[...] 血統の権利が国民という家族の権利となっていることを示している。(p. 97-98)

大衆的な識字は、精神の領域に客観的な平等を作り上げた。[...] 民主制と国民は、それゆえ、大衆の識字により均質化された社会の内部と外部の二つの顔であるにすぎない。(p. 160)

従ってアングロサクソン、フランス、ドイツでは国民と平等の関係は次のようになる。

アングロサクソンの人類学的資質は、典型的な共鳴状況を作り出した。核家族においては、個人は最小限に統合され、国民は原子論的で個々に差のあるものと認識される。文化的に階層化されている社会の登場は、集団に関する価値と矛盾しない。[...] あらゆる不平等 [...] を助長する。

ドイツ、[...] 日本 [...] 統一と不平等が根付いているこれらの国は、自らを、よくまとまっているが、異なった相互補完的な社会集団からなる非均質的な国とみている。(pp. 166-168)

フランス [...] イデオロギー上の論争に支配的な影響力をもつ中央の個人主義的類型は、新しい文化的階層化と平等という最優先的価値との間の矛盾の出現に大混乱している。(pp. 168-169)

国民の登場は平等的な均質化の効果であり、その再点検は文化的な相互離反の結果である。反国民主義は不平等主義である。 [...]

さらに、国民はグローバリゼーションによって越えられるものではなく、異なる反応を生み出す。

国民の内部分裂のダイナミズムが経済開放となって現れ、グローバリゼーションという

目に見える意識レベルの現象に導くのである。 [...]

国民社会の解体のメカニズムが働く力は、変動要因である。調整要因は、無意識の人類学的資質である。それが、アングロサクソン世界の絶対核家族から来る非平等な個人主義であれば、解体は最大限進む。 [...] 直系家族型であれば、国民の連帯・結束・親近性を促進するので、現実には解体が話題に上らない。(pp. 174-175)

国民は、経済主体とは独立に存在している。そこには人類学的・家族的・教育的構造がある。企業を超えた人間的範囲での、習慣や経済的潜在能力である。 [...] 仮称消費により鈍化した世界システムでは、直系家族型の勝利は一時的なものでしかありえなかった。90年代にはいると、80年代に勝利した経済が、困難に陥った。 [...] すべての国民に当てはまる普遍的メカニズムと、このグローバルな脅威に対する独特でずれた反動とを組み合わせることにある。国民を否定するこのシステムは、実際には、国民の存在を明らかにするところに行き着く。(pp. 198-199)

そして特にフランスについて言えば二つの家族類型がそれぞれ社会階級による分裂と統合解体を拒否する。

人類学的にみたアングロサクソンのシステムは、平等主義的ではないし、強度に構造化された諸集団の存在も信じていない。 [...] フランスは、人類学的にみれば二面的であるが、社会分裂に対する憎悪は二倍である。パリ地方の核家族は、社会とは何よりも平等でなくてはならぬという認識をもち、新しい不平等を予め拒否する傾向がある。周辺の直系家族では、個人が集団に統合されているが、社会体の統一の夢が守られ、統合解体への恐怖がある。(p. 319)

このような明快な分類は概括的には正しいとして、現在にも当てはまるのだろうか。またそれが経済のあり方を決めているのだろうか。さらに国民国家という政治的な存在が家族の類型によってのみ決定されているのだろうか。これは専門的な研究を待たなくてはならない疑問であるが、まず、工場閉鎖やリストラが大幅に行われ、派遣や請負の仕事の増えている1990年代以後日本がこの直系家族型という類型に当てはまるだろうか⁽⁴⁾。歴史学や人類学は一般化することで分析をするが、文学や文化は個々の具体例を虚構の形で示す。その例を見てみよう。

2 文化にみる家族の多様性と変化

言語は必要に応じて生まれ、使われ、逆に世界観それ自体を作り出す。英語やフランス語では兄弟、姉妹は年齢によって区別されない単語であるのに対して、日本や韓国でははじめから、年齢によって区別された単語である。フランス語にも年齢の序列を示す形容詞はあるが、いつも付随するわけではない。年少を示す二つの単語、cadet (年下の) と petit (小さい) のうち、後者は広く用いる大きさを具体的に表現する単語であり、抽象的には petit ami (恋人) のように親密さを表すこともある。したがって、年齢の上下は血縁の中では二次的にしか表現されていないといえるだろう。それに対して、「兄弟」は単に血縁だけでなく、血縁ではなくとも精神的な同志の関係を自発的に結んだことをも意味するが、そこでは同時に主従の関係のような上下関係が年齢による区別によ

って明確である。しかし、トッドは言語と精神は、家族の類型とは異なると言っている⁽⁵⁾。

フランスの文化の中の家族について、近年テレビドラマや映画になり、さらにDVDになった小説は一般によく知られていると考えられるので、それについて考えてみよう。DVD版は小説との間に人物設定や筋などに著しい違いがある場合があるが、全体的にはかなり忠実に全体を再現している⁽⁶⁾。

スタンダールの『赤と黒』(1830年)では、王制復興期に生きた主人公ジュリアン・ソレルは第3子としてプチ・ブルジョアの父親から相続できないので、才能によってナポレオンのように成功することを夢見て、地方都市の市長宅の家庭教師、僧侶、パリの大貴族の秘書になり、その娘婿になりかけるところを、元の恋人の手紙で妨げられる。ここにはアルプ＝ロレーヌ地方の直系家族の中に居場所のない青年が、パリ地方の平等主義的核家族へ移動して社会の中に居場所を求めて奮闘する物語といえる。大貴族の相続人の地位ではなく、母とも言えるような夫人との恋が最終的な到達地点であることは、観念的には家族の中への再統合ということもできるかもしれない。

次にブルジョアが政治的な力を増してくる第二帝政に続く時期のバルザックの『ゴリオ爺さん』(1835年)は主人公ラスコニヤックが、パリに教育を受け出世をすることを家族から期待されて上京し、娘にすべての財産を与えた老人が孤独死する過程に立ち会う物語である。ここにも地方の直系家族からパリへの移動が見られる。そして主人公は自分の利益にならなくなれば親でも見捨てる

(4) 就業形態別に労働者の割合をみると、正社員が62.2% (前回65.4%)、正社員以外の労働者が37.8% (前回34.6%)となっている。正社員以外の労働者では、パートタイム労働者が22.5% (前回23.0%)、派遣労働者が4.7% (前回2.0%)となっている。(厚生労働省発表平成19年就業形態の多様化に関する総合実態調査結果の概況平成20年11月7日)

(5) 「家族構造は、また言語構造とも一致しない。この世界地図では、人種、言語、精神構造を同一視しよう

とする人種主義的理論の落とし子である、かの有名なインド・ヨーロッパ系なる人種の分派を識別することは困難である。』『世界の多様性』pp. 74-75

(6) 映像でも理解できるように話のある程度単純化したり、視聴者の注意をそらせないようにメロドラマ化したりしているのは、ある程度は限られた時間と言う制約を映像が持っていることを考えるとやむを得ない変更である部分もあり、あまりに視聴者に迎合していると見える部分もある。

家族の残酷さを見せつけられることになる。その中で成功することを選択することでこの物語は終わる。ここには血縁さえも利益次第という極端な都市の成り上がり者と、拠り所となる地方という地域差を見ることも可能である。しかし、バルザックは『ユージェヌ・グランデ』（1833年）では吝嗇で家族の幸福よりは利益を追い求める地方のブルジョアを描いている。

さらにブルジョアが勢力を持つ時代のフローベールの『ボヴァリー夫人』（1857年）では、虚構の世界の恋愛や大都市の上流社会や夫の社会的成功の夢と比べて、農場主の娘は田舎の家族に幻滅する。現実と虚構の落差、階級と地域間格差の中では家族はあまり意味を持っていない。

ユーゴーの『レ・ミゼラブル』（1862年）は何度も映画化され、子供のための話や日本のアニメでも世界的に知られているが、主人公は姉の家族を養うために犯罪者になり長い刑期の後に家族を失ってしまうが、司教に救われ、仕事で成功する。しかし、前科のために逃亡を余儀なくされる。その間も世話を頼まれた娘を引き取り結婚させるが、経歴のために世間からはなれて死んでいく。主人公を支えるのは貧困の中で解体した家族ではなく、キリスト教の博愛精神であり、自分で選んで家族とした娘である。家族が解体した後を埋めるものがある種の理想に求めているといえるだろう。この種の博愛精神がフランスでは現実に生きていることがあることはピエール神父に実例をみることができるだろう⁽⁷⁾。

第三共和制のゾラの『ジェルミナール』（1885年）にはフランスの北部の鉱山で働く労働者と資本家の家族が描かれる。鉱山労働者は3世帯が共同生活をする大家族であり、子供は結婚によって独立するが、可能な限り親子は扶養し合っている。現在では平等主義核家族に分類されている地域であるが、この分類は時代と階層によって異なっているだろう。主人公エチエンヌは家族を失い

仕事を求めてある家族の所に下宿して、労働運動を組織するようになるが、ストライキの失敗によって再び放浪に出て行く。資本家の圧力と過酷な労働条件にもかかわらず家族も労働者全体も、多くの軋轢をかかえながらも、共同して組織力を少しずつつけることを学んでいく。これは陰画的とは言え共同体讃歌といえるだろう。恋愛関係も入り組んでいるとはいえ、家族とともに支えとなっている。

プールの『失われて時を求めて』（1913-1927年）の主人公の家族は自由主義的核家族に分類されているパリの主に住んでいるが、小説の中での家族の範囲は核家族よりも広いようである。中心となるのは権威を持つ父親と変わらぬ愛を注いでくれる母と祖母である。子供の時の休暇は寝たきりのような大叔母の家ですごしている。物語の発端となるマドレーヌ菓子をお茶にひたして味わった瞬間に訪れる至福の感覚は、大叔母のお茶でもあり、母のお茶でもあり、両者を結びつけるのである。田舎の親族の家や近所のスワン家やゲルマント家の人々まで含み込む大きな外縁を持つ家族は、不確かな恋愛に比べれば確かな拠り所である。

ジッドの小説の中で『背徳者』に見られるように家族は束縛であり支えである。『狭き門』『田園交響楽』にみられるように家族や恋愛はしばしば幻影のようにとらえどころがない。『法王庁の抜け穴』や『贋金作り』にみられるように、束縛の最も少ない存在として構想されている私生児もまた家族を求めて、自ら家族を選ぶのである。『女の学校』三部作には家族と恋愛の自己欺瞞を描いているが、結局は答えを出さない故にこの小説の末尾は放棄されたといえるだろう。最後の小説『テセウス』で主人公は妻の教唆により息子を殺し、その妻も自殺し、家族を失う。ただ建設した都市のみが残るのである。これはジッドが、文学こそが人生の証であると言っているのだと解釈される

(7) 立川, 前掲書, p.153

作品であるが、現実のジッドは家族を残し、友人に疑似家族のように囲まれて人生をすごしている。又人民戦線を形成するのに役立つなど大きな役割を果たした共産主義のロシアにおける独裁制を批判した。血縁による家族に批判的であったとしても、イデオロギーによって形成される集団にも批判的だったのである。

マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』(1922-1929年)は第一次世界大戦に従軍した世代のブルジョワの二つの家族を描いている。中心になるのは父親がカトリックの保守的な金持ちの家族である。兄は医者として従軍し、病死する。弟は父の高圧的な権威に反発して、大学に入ると家族を離れて、左翼運動に参加し、第一次世界大戦の最中、反戦活動によって死亡する。もう一つは父が殆ど不在の家族である。この家族はパリ地方の平等主義的核家族に属している。20世紀初頭、伝統的な父権的家族の否定はマルクス主義や社会主義の影響の基に血縁ではない共同体を建設するという夢のためである。

このように家族というのは時代、階層、状況によってある程度分類できるとはいえ、ミクロ的に見れば、かなりさらに多様である。この頃までは家族は個人にとって不可欠な単位をなしている。それは少しずつ解体していく。これは、ルナールの『にんじん』(1894年)ですでに、家族の関係がよくないため子供はその中で孤独であることにも見られる。この時代にはモーリアックの『蝮の絡み合い』(1932年)のように家族の構成員の軋轢を描いたものが少なくない。こういう否定は1968年世代にまで続いているとみることができる。

第二次世界大戦後「昨日おかあさんが死んだ」で始まるカミュの『異邦人』(1942年)は、植民地生まれの根無し草の青年を描いた小説として一世を風靡したが、主人公は現地人を殺したことがかりでなく、親の死に関心であったと見なされることによって死刑判決を受けるのである。ここにはまだ家族の崩壊に対する警告があるという見

方をすることもできるかもしれない。

フランソワ・トリュフォー監督François Truffautの『大人はわかってくれない』*Les quatre cents coups* (1959年)など子供や若者の孤立を描いた映画は戦後少なくない。日本ではあまり知られていないモッキーJean-Pierre Mockyは政治家の汚職による腐敗など社会問題を映画のテーマに取り上げた監督であるが、『ひとり』*Solo* (1970年)では、この種の伝統的家族観の否定は家父長的な家族を否定して核家族を作るのではなく、すべての相続もまた放棄して家族の場所を去ることを意味している。

この否定と放棄の対象であった家族というものがすでに存在していない子供を描いた作品が、2009年にノーベル賞を受賞したことで話題になったル・クレジヨオの作品には少なからずある。映画化された『ル・モンド』(1978年)には南フランスの港町をどこということなくさまよう少年が描かれている。この少年は心優しい人々とつぎつぎと行き会い穏やかな自然と交流する様が淡々と描かれる。家族以外のところに家族に代わるような人間関係を描き出そうとしているかのようである。代表作の一つ『砂漠』(1980年)には民族の歴史と二重写しにされているが、家族から捨てられ結婚させられそうになって逃げ出す少女の彷徨が描かれる。『ロンドその他の三面記事』(1982)の短編『ダヴィッド』の主人公は母と暮らし、兄は姿を消している。この孤独な少年は失われた絆を兄と同じ行為を繰り返すことで探しているようである。最近話題になったミュリエル・バルベリの『優雅なハリネズミ』(2008年)⁽⁸⁾は、俗物の親を馬鹿だと思っている子供と外見や社会的地位にかかわりなく賢く優雅なアパートの管理人の交流を軽妙に語る話である。フランスに隠然とある社会的階級と知性という名の概念の偏りを揶揄している。これはフランスの指導層の無能と利己主義を批判するトッドに通じるものである。

以上に見てきたように、19世紀から20世紀はブ

(8) ミュリエル・バルベリ、『優雅なハリネズミ』、早川

書房、2008年

ルジョアが政治経済的に力を得るとともに、家族が現在に近い形になっていく過程といわれている。しかし、階層によってかなり違いがある。一般的には父権性の家族が19世紀末頃までには各階層に構成される。20世紀初頭から1968年にかけて家族に反抗する子供や家族の中の葛藤がテーマになったのは、それがまだ存在していたからである。20世紀の半ばをすぎると個人が、トッドの言い方を借りれば、「原子化」していく作品の方が多くなる。しかし、虚構の世界だからとはいえ、そこには血縁ではないが何か人間の共感のようなものを描こうとしている。両大戦間世代のアンドレ・マルローやサン・テグジュペリーの連帯につながるものである。

現在フランスはパクス法（婚姻によらない家族が家族としての法的権利を一部認められるための契約）にみられるように婚姻によらない家族がふえ、また福祉政策のために出生率が上がり、家族が復活してきているといわれている。

フランスの文化は日本の明治以後の文化に大きな影響を与えた。スタンダールは大岡昇平の模範となり、モーパッサンやゾラは永井荷風など多くの作家に大きな影響を与えた。また、夏目漱石や島崎藤村の家族像については多く論じられているであろう。このような中から、日本の伝統的な直系家族と西洋の自由主義的な家族という対立した見方が作られた。これは比較による単純化といえることができるだろうが、戦前の世代の日本は直系家族といえる。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』（1969-1972年）のテレビドラマ化（2009-2011年）は、新興国と先進国の連合のあいだで、技術立国の先行きの不透明感を感じる今日、明治維新以後の日本の成長期のある時期にナショナリズムの長所をみるためであろうか。戦前の家族を背負った長男とその家族が理想的に表現されている。没落士族の親には

経済的な援助を殆ど受けることなく、自分は親兄弟の扶養を担い、物欲を持たず、軍隊の改善に尽す、高い能力と強い精神力を持つ男性像である。それは確固とした家族の観念に支えられてもいる。このような時代への郷愁なのだろうか。

戦後作家の中でも翻訳が多い作家のうち、大江健三郎を考えると、初期作品から一貫し、子供や、森と村の家族の歴史は決定的なテーマであり、兄弟姉妹はいずれかが抵抗する者と証言する者の役割をしている⁽⁹⁾。村上春樹の小説では、それに比べれば個人が宙に浮いているように感じられる。ある程度フランスと同じ傾向が見られるということが出来るかもしれない。

近年の日本について見るとき、興味深い文化現象として、アジアの現代文化、特に韓国ドラマの流入を挙げることが出来るかもしれない。『冬のソナタ』（韓国放映2002年、日本放映2003年）以後、韓国ドラマは日本ではわずかな時間差で数多く放映されているし、DVDの形で輸入もされている。トッドの分類では日本と韓国は同じ直系家族である。確かに同じ中国文化の影響を受けて孝は重要な道徳である。しかし、日本と韓国の家族にはドラマを見る限りかなりの違いがある。韓国では直系家族の倫理がもっと確かな倫理である。韓国は日本よりも大きく中国の影響を受けて、中国の家父長制共同体により近く中間型を作っているのではないだろうか⁽¹⁰⁾。このようなドラマが日本で流行するのは、明確な倫理があれば、ドラマは単純化できるのでわかりやすいからということもあろう。エキゾチスムもあろう。さらに明確な倫理への郷愁だろうか。

3 統計に見るフランスと日本の家族の姿

家族とは何かは時代によって階層によって大きく異なる。すでに見たように、19世紀のフランスのブルジョアの家族は現在の中流家庭の家族とは

(9) 立川信子『小説の中の地域の現実と虚構－大江健三郎の「四国の谷間」をめぐる物語の中のフランス－』

地域創成研究年報第3号（2008年3月）愛媛大学地域創成研究センター、pp. 100-112

フランス人の居住形態

(図1) 世帯の家族構成 (NATTEF02313)⁽¹¹⁾

家族構成	1968年	1975年	1982年	1990年	1999年
独居男性	6.4	7.4	8.5	10.1	12.5
独居女性	13.8	14.8	16.0	17.1	18.5
単身の親の家族	2.9	3.0	3.6	6.6	7.4
子供のいない家族	21.1	22.3	23.3	23.7	24.8
子供のいる家族	36.0	36.5	36.1	36.4	31.5
複合家族(複数世代同居など)	19.8	16.0	12.5	6.1	5.3
世帯数(百万)	15.8	17.7	19.6	21.5	23.8

フランス本国
国勢調査

かなり異なっている。家族とは現代では一般には血縁の近い親族をさし、同居している頻度が高い集団をさしている。ではまず居住の仕方について見てみよう。以下図1から4までのフランス国立統計経済研究所国勢調査によっている。

フランスでは独居の数が増えているが、単親の家族、子供のいない家族も増加傾向にあり、家族の数はあまり変わっていない。子供は早い段階で独立し、離婚が多いことは独居に関する報告から推測できる。(図1、図2)

1999年の独居に関する報告では、「30年間に独居人口は2倍になった。1962年全人口の6.1%か

ら1999年には12.6%になった。これはあらゆる年齢で起こっている。」⁽¹²⁾ 独居率は年齢や職業によって異なる。農業では少なく、社会的地位及び学歴が高いほうが女性は独居率が上がる。管理職では21%、労働者では9%。男性では職業差は少ない。特定の職業を除き、10%から16%である。日本よりは社会進出が進んでいるとはいえ女性が管理職につくのは男性よりむずかしく、家事労働も日本よりは分担されているといっても男性より多いことから生じる結果と考えられる⁽¹³⁾。フランスでも女性は職業を十分に維持するためには代価を払っていると言える。

(10) 父親の借金を返済するためにサラ金業者になって奮戦する『銭の戦争』(日本放映2009年)など現代のドラマにもそれはみられる。長男には家族の責任を背負い扶養する明確な義務がある。歴史ドラマではさらにそれは国家規模になる。父親の志を継いで子供は侵略する他国と戦い家族を守らなくてはならない。史実を基にしたドラマでは将軍がクーデターによって王を殺し、王位のために兄弟を殺すという倫理違反は国家のためという論理に譲られる。長兄がいつも最も優秀というわけではない。年齢によって秩序をつけることは無駄な混乱を減らすことができるから有効ではある。その有効性よりも問題解決の労力が大きくなると順位を変えなくてはならなくなる。『朱蒙(チュモン)』(韓国放映2006年5月-2007年3月、日本放映2006年9月-2007年5月)『大祚榮(テジョヨン)』(韓国放映2006年9月-2007年12月、日本放映2007年-2008年7月)『竜の涙』(韓国放映1996年-1998年、2009年日

本再放送)、『淵蓋蘇文(ヨンゲソムン)』(日本放映2009年)『大王世宗(テワンセジョン)』(韓国放映2008年、日本放映2009年)これらのドラマは中に出てくる日本の歴史や風俗からみても時代考証とはかなり無縁に脚色されている箇所もあり、ドラマは現実の韓国ではないが、ある程度は現在の人々の考えを反映しているだろう。ただし、子供の反抗や家族の崩壊を描くことの多かった戦後のフランス文化とは対局的な家族観は、日常生活の中に入り込むテレビドラマであるからという理由も大きいだろう。

(11) http://www.insee.fr/fr/themes/tableau.asp?reg-id=0&ref_id=NATTEF02313

(12) Myliène Chaleix, division Recensements de la population, Insee, 7, 4 millions de personnes vivent seules en 1999, recensement de la population de 1999, N°788, Juillet 2001, <http://www.insee.fr/ffc/docs-ffc/ip788.pdf>

(13) 同書

(図2) 年齢及び性別居住形態 (1999年) (NATTEF02316)

%

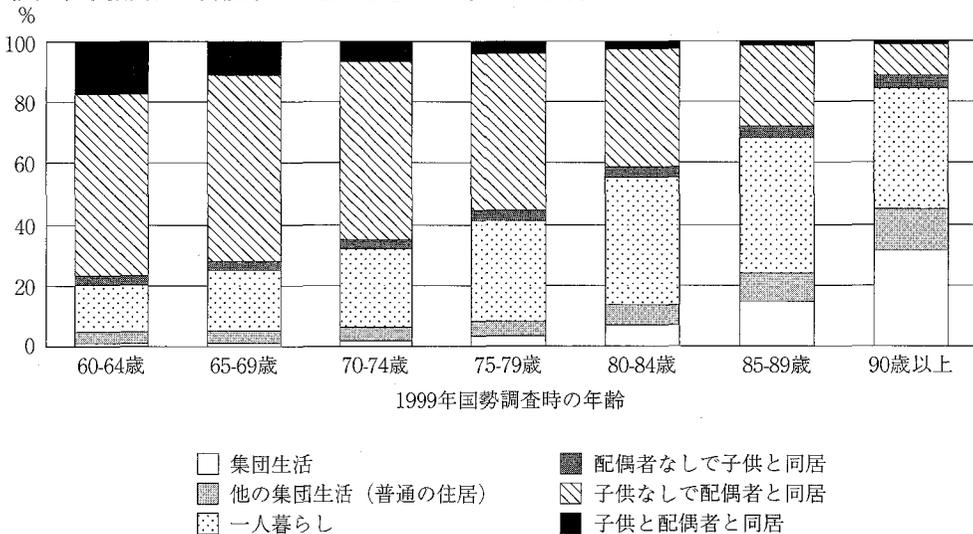
	両親と同居		独居		子供のいない 夫 婦		子供のいる 夫 婦		単身の親の 家 族		その他*	
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男
25歳未満	86.6	90.6	3.9	3.2	3.8	1.7	1.4	0.5	0.5	0.0	3.8	4.0
25-29歳	15.0	29.1	15.4	18.0	27.3	25.6	32.7	19.6	4.9	0.3	4.6	7.4
30-44歳	3.0	7.6	8.2	13.5	8.6	11.0	66.9	61.6	10.9	1.4	2.5	4.9
45-59歳	1.1	2.2	11.8	11.5	32.7	27.2	42.2	52.1	9.4	2.4	2.8	4.6
60-74歳	0.3	0.5	27.3	13.2	53.7	64.7	8.2	15.1	4.6	1.2	5.8	5.3
75歳以上	0.0	0.0	48.4	20.0	23.9	62.8	1.5	5.2	4.5	1.4	21.6	10.6
全体	27.4	33.8	14.7	10.4	20.8	22.0	26.1	27.6	5.6	1.0	5.4	5.1

フランス本国

*: 複数世代など集団の家族。

国立統計経済研究所 国勢調査

(図3) 高齢者の年齢別の同居の形態の分布 (1999年)



高齢者問題というのは家族の形態の明らかな指標となる。高齢者というのは何歳かということが変化していることは内閣府発表(平成21年12月21日)の通りである。日本では39歳以下を若手と分類している所もあるが、アメリカの再就職を探すサイトでは40歳以上を高齢者としているものもある。年齢による区別は幅が広い。金融危機や財政難によって年金が減少している高齢者の雇用にみられるように、年齢による差別は、先進国では社会問題となっている。現在スペイン政府は財政難

から公務員の退職年金支給年齢を67歳にする提案をしている。退職年齢も従ってさまざまであるが、一応職業生活から同年代の過半数が退職し、日常生活に老化による支障の生じてきている年齢を超えている者と考えると、個人差はあるだろうが70歳以上は高齢者に属するだろう。ここから言えることは、伴侶または子供など家族と暮らしている人が多い。60代から70代では60%、80代で40%である。高齢になるほど一人暮らしが多い。伴侶や子供が死亡している率が高くなることもあ

(図4) 年齢別及び性別就業・就業率 (NATnoro3171)
1975年以後のシリーズ

2008年

	男性	女性	全体
就業率 (%)			
15歳またはそれ以上	57.5	47.0	52.0
15-64歳	69.4	60.3	64.8
15-24歳	31.5	25.9	28.7
25-49歳	89.6	77.4	83.4
50-64歳	58.8	52.1	55.4
そのうち：55-64歳	43.9	39.0	41.3
65歳またはそれ以上	2.2	1.1	1.6
就業人口 (千)			
15歳またはそれ以上	13,670	12,243	25,913
15-64歳	13,576	12,179	25,755
15-24歳	1,195	964	2,159
25-49歳	9,035	8,058	17,093
50-64歳	3,346	3,157	6,502
そのうち：55-64歳	1,620	1,527	3,147
65歳以上	94	64	158

る。また高齢者用の施設に暮らしている人は高齢になると増えるとはいえ、少ない。これはこの報告が次のように説明している。「施設で暮らす人は非常にまれである。家にできるだけ住みたいという願いは社会政策、特に家で介護サービスの発展によって増えている。」⁽¹⁴⁾ (図3)

次の女性の就業率が高くなれば、介護はむしろかしくなるので、就業率は高齢者の同居と関係があることが予想される。専業主婦の場合は家事労働を主として担当し、配偶者の給与によって生計を立てることができるのであるから、家族の一体感も強いと推定されるからである。フランスでは25歳から49歳の出産育児の時期の12%を除けば、男女の就業率の差は10%未満である。(図4)

次に2000年国立統計経済研究所の家族の消費の

変化を見てみよう。トッドの指摘しているように、教育費などはフランスでは多くなく、現在の生活のために使われる消費が多い(図5)。日本では、戦前から戦後にかけても、つい最近まで、男子に、特に長男に、将来の扶養を期待して、多くの投資を行った家族もあった⁽¹⁵⁾。男子にはよい勉強部屋を与え、進学校の高い教育費を払ったのである。さらには結婚資金を与え、同居を想定して共同で家を購入する親もいる。

次に日本についての調査をみてみよう。

平成7年国勢調査平成7年の全国における人口1億2,544万人(年齢「不詳」を除く)についての親子の同居等に関する特別集計結果(平成12年9月14日公表)によると親との同居率は42.5%。子どもの同居率は50歳以上(人口4,261万人)では

(14) Virginie Christel, *Trajectoires résidentielles des personnes âgées*, Insee, p. 528

http://www.insee.fr/fr/ffc/docs_ffc/DONSOC06zg.PDF

(15) 藤見純子・西野理子編, 『現代日本人の家族, NFRJ

からみたその姿』, 有斐閣ブックス, 2009年, p. 42-43, 日本に関しては以下のサイトなどを参照。<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001054377>

(図5) 機能別世帯消費の変化 (NATFPS05116)

%

	前年度比の変化						家計消費出費 価値部分
	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2008年
食料, ノーアルコール飲料	1.1	1.5	1.4	0.6	1.5	0.1	13.5
そのうち食料	0.6	1.6	1.2	0.5	1.4	0.0	12.4
アルコール飲料, タバコ	-7.8	-9.5	-0.6	1.0	-0.6	-1.6	2.9
衣料と靴	3.4	1.4	0.7	1.6	1.9	-2.3	4.4
住居 (1), 暖房, 証明	3.1	2.7	2.5	1.8	1.4	2.4	25.4
住居の設備	2.3	3.6	3.5	3.0	4.4	-0.8	5.9
健康 (家族負担分)	2.6	5.8	4.7	7.2	4.2	5.9	3.6
輸送	-1.2	2.0	1.7	0.2	2.3	-2.3	14.6
コミュニケーション	8.5	5.6	6.8	8.8	6.3	2.9	2.7
余暇と文化	4.6	6.6	5.4	6.2	6.5	2.1	9.0
そのうち電気及びIT機器	10.6	18.4	17.6	17.9	19.5	9.0	2.0
教育 (家計負担分)	3.4	2.5	2.4	5.7	4.0	3.3	0.8
ホテル, カフェ, レストラン	1.5	0.6	1.7	2.5	2.1	-0.7	6.2
他の財やサービス	2.5	2.0	2.3	3.3	1.4	0.1	11.6
家族の消費支出	2.2	2.6	2.6	2.4	2.4	1.0	100.0
ISBLSMの消費支出 (2)	-3.3	-1.5	0.0	2.9	4.5	3.1	
APUの消費支出 (2)	2.7	2.3	1.6	1.4	1.6	1.6	
そのうち健康	3.4	2.9	2.6	2.3	2.9	2.1	
教育	0.0	0.3	-0.2	-0.7	-0.7	-0.9	
世帯の実消費	2.2	2.5	2.4	2.2	2.3	1.1	

(1) : Y compris les loyers dits "fictifs" (montant que les propriétaires de leur logement verseraient s'ils devaient louer leur logement).

(2) : Dépenses de consommation des institutions sans but lucratif au service des ménages (ISBLSM : unités privées dotées de la personnalité juridique qui produisent des biens et services non marchands au profit des ménages, comme les organisations caritatives, les clubs sportifs, etc.) et des administrations publiques (APU) en biens et services individualisables.

56.3%と5割を超えている。高齢になるほど子どもの同居率が高い。女性の方が男性よりやや高くなっている。

平成7年の全国における有配偶の女性人口3,204万人のうち労働力状態が家事の人、すなわち、専業主婦は有配偶の女性人口の45.2%を占めており、半数近くが専業主婦である。

次に2009年の調査を見てみよう。内閣府発表平成21年12月21日「高齢者の生活実態に関する調査」結果、同居家族（本人を含む）について「2

人」が44.3%と最も高い。次いで「3人」の21.5%、「1人」の11.1%。(図6)

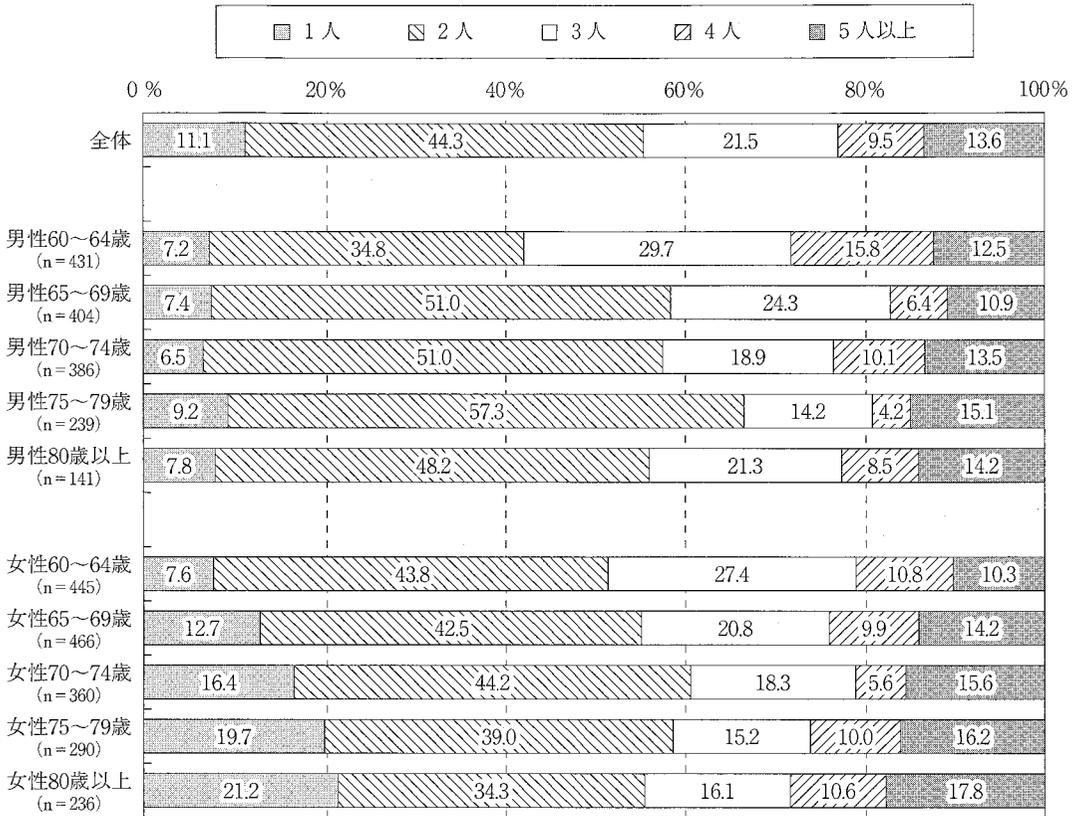
性・年齢別に見ると、女性は高齢になればなるほど一人暮らしが増え、80歳以上の女性の一人暮らしは2割を超える。さらに詳しい研究では「子どもとは、40代において男性の約80%、女性は86%ほどが同居している。高齢層ではこの数値は低まるが、それでも男性は70代で約4割、女性は5割近くが子どもと同居している。」⁽¹⁶⁾

問題がある時、頼れる人について、「いない」と回答した人は、総数で3.3%であった一方、「未

(16) 同書, p.18

(図6) 内閣府発表平成21年12月21日「高齢者の生活実態に関する調査」, p. 38.

Q28 「現在、一緒に住んでいるご家族はあなたを含めて何人ですか」



婚」では5人に1人。一人暮らし世帯では、14.0%が頼れる人がいないと回答。(図7)

従って、独居は増えているといっても8割近くは家族と同居している。又いつの場合も家族を最も頼りにしている。次のような調査結果によっても理由を推測することができる。「『親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ』という意見と、「年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ」という意見に対して、長男のほうがそうではない者(次男以下の男性)より明確に肯定している。両者ともおおむね賛同者が多いものの、長男は、親との同居や扶養により責

任感をもっている。」⁽¹⁷⁾

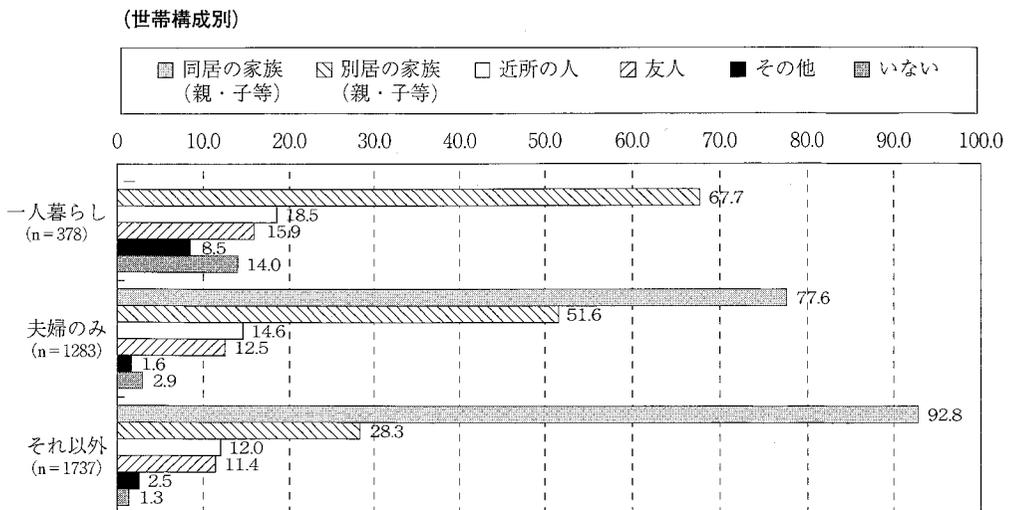
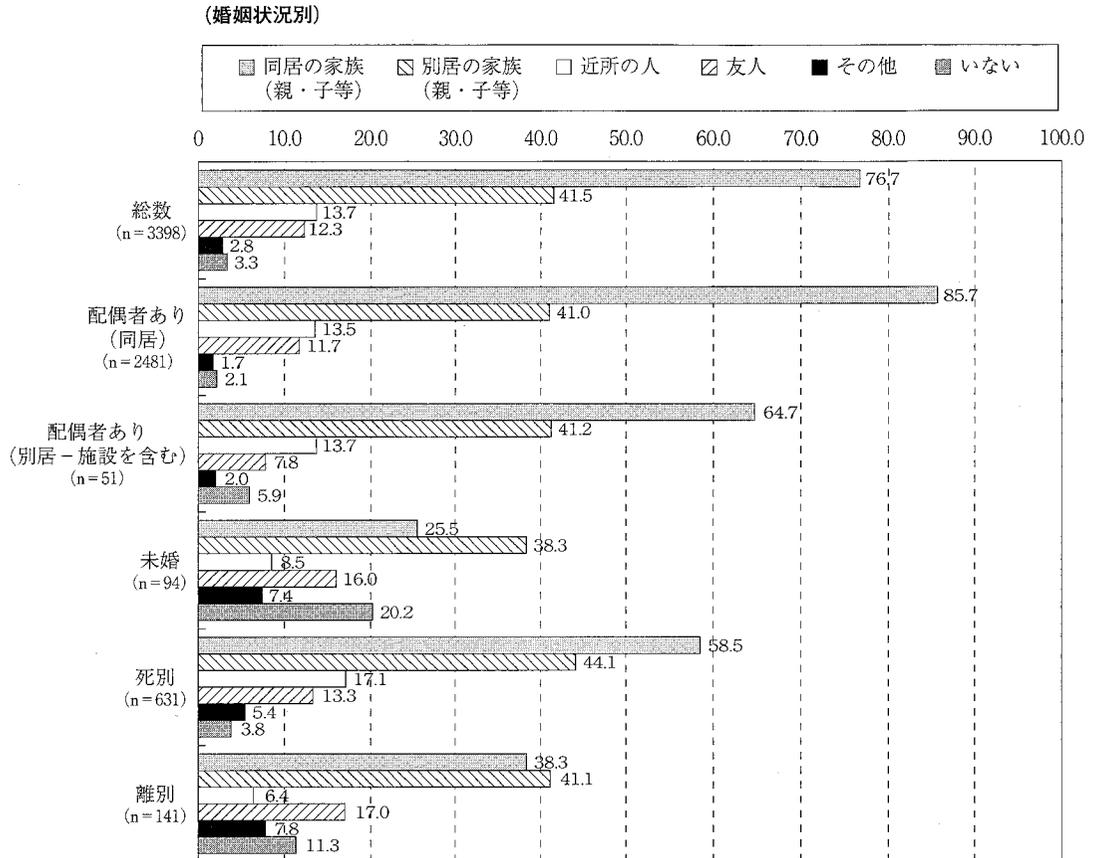
女性の就業については、「夫のみ就業32%、共働き45%、妻のみ就業5%、夫婦とも無職18%。つまり現代日本では、『夫は外、妻は内』という性別分業型のパターンよりも、共働きのほうが多いことが確認できる。」男女差別が減少し働きやすくなった。雇用が不安定になり、かつ十分な給与がいつもあるとはかぎらなくなった。電化などで家事が楽になった。その理由は相当あるだろう。

1995年と2010年の調査結果を比べると、独居が増えているが、高齢の家族が同居する一般的な傾向は変わらない。女性の就業率は逆転して、過半

(17) 同書, p. 32

(図7) 同書, pp. 30, 31.

Q14「あなたは、病気のときや、一人ではできない家の周りの仕事の手伝いなどについて頼れる人はいますか」(複数回答)



数専業主婦から過半数共働きに変わっている。

最新の研究においても、家族の類型は、『現代日本人の家族』(2009年)では次のような結論である⁽¹⁸⁾。

多くの世帯は夫婦を中心に構成され、子供が小さい時期には夫婦と子供からなる世帯(いわゆる核家族世帯)が形成されること、子供は成人するにつれて別居を開始するが、一部はそのまま世帯に同居をつづけること、高齢期になると、より高齢の親と同居を開始するようになること、また一方で有配偶者の子供との同居もなされること、こうした親と子夫婦の同居は夫方に傾斜する傾向をしめす。こうした世帯構成の動態は、直系家族制と呼ばれる家族制度の類型(子が結婚後親と同居することを原則とする家族制度)と親和的である。高齢になった親との同居は頻繁にとられており、夫婦家族制に基づく直系家族が高齢層では観察されることになる。「家族のあり方としては夫婦家族制が主流になっていることを意味する。一方で親が高齢になったときに子供が親と同居する慣行も広く見られる。文脈を推測すれば、それは家産や家系の維持・存続を目標とした伝統的な直系家族制に基づくものではなく、原則として夫婦家族制にたち、親の介護などの事情が発生、または予期される場合に同居が選択されていると考えられる。

以上に見るように配偶者又は二世以上で同居している家族は日本では現在でも大多数である。同居していない理由には遠隔地で働いている。または住居に十分な広さがないという理由がある場合があることは推測できる。また日本の場合同居してない場合でも家族が高齢者の主な支えである。つまり精神的物理的に何らかの援助を恒常的に行っているのである。これは日本が西洋文化を

取り入れるときに行った和洋折衷のような家屋のようなものである。日本はトッドが言うように単純な直系型家族であるのではなく、直系家族の効率性に、一部平等核家族の構成員の能力を最大限に活用する方法の両方を組み合わせるという型を作り出してきた。今、数多くの家族が個人の努力によって支えられている。伴侶の介護疲れから自殺する老人や親の介護のために職を失い路頭に迷う子供のニュースは絶えず流れている。特に同居しているのが単身者である場合には過重な負担が多く問題が生じることは前掲書でも指摘されている⁽¹⁹⁾。

もし、このような平等主義的核家族と直系型を組み合わせた社会で、直系型家族の部分が機能しない場合にはどうなるであろうか。日本社会は『菊と刀』などの日本文化論ではしばしば、倫理に対して恥、つまり世間の評価に価値を見る世界と論じられてきた。これは内在化した規範ではなく、外在的な圧力である。この図式が果たして日本人全部に適合するかは問題だが、この圧力が物理的に有効に作用するのは、地縁や血縁という共同体が有効に成立している時であるが、あらゆる関係が表面的でしかない時には何が起こるだろう。多数の家族が個人の人間性と努力によって支えられる社会に、空間や時間があっても病気の老人に必要な支援をしない家族がいれば、また親に援助は受けたが、援助はしないという家族がいれば、どうなるだろう。困窮している老人にインタビューすると、子供に、迷惑をかけたくないと答える場合がよくある。世界中の多く地域で、家族は自らを養うために子供を作る。そういう地域は多産である。日本は長年、年功序列の直系家族であり、コミュニケーションは暗黙になされるはずであった。自分の例に習わないことを子供に期待はしないだろう。従って、直系型を期待して作られた社会では家族の十分な援助のない高齢者はより多くの問題をかかえることになるだろう。又こういうケースが増えれば、トッドの言う直系家族の効率

(18) 同書, p. 104

(19) 同書, pp. 202-203参照

があるとしても作用しなくなるだろう。

親子兄弟という血縁関係以外に、社会的な人間関係は現在の日本の社会には強力には存在していない。無縁社会の解決策として、NHKスペシャル『無縁社会』が言うように近所付き合い、いわば偶然の地縁がそれを補うことができるのだろうか。放送で挙げている例は幼稚園を経営している家族の子供が、離婚して子供を失った人の隣にいた場合であり、心理的に距離がたまたま近かったまれな例かもしれない。家族とは自分の利害の範囲だけという狭い概念が通用し、親子関係の人間性さえいつも確かとは言えない社会ならば、偶然の近所の善意に大量高齢者の時代は期待することができるだろうか。日本型家族においては血縁による人間関係が薄くなったというよりは、内と外という日本の従来から言われている人間関係の区別の仕方、関係の有無の範囲が核家族という名の下に狭くなり、個人の利益に直接関わる関係に制限されてきているといえるのではないだろうか。日常的な習慣でいうなら、方向が同じなら知らない人でも話を始める。重い荷物を持つ人がいれば、手の空いている人が手を貸す。こういう情景は欧米諸国では見かける。夫婦単位の社会と言われるが、友人、数世代、兄弟一緒に休暇をすごす家族は少なくない。出かける時は夫婦と子供、荷物を持つのも家族のものだけというのは、内と外という従来を自分の利益に合うように制限解釈しているからであろう。こういう解釈は無縁社会を容易に作り出し、自分もその中で生きることになるだろう。

これはもちろん生活習慣だけの問題ではない。トッドの言うように家族の類型はひとつではなく、多様である。むしろトッドの言うようにすべて分類できるというよりは、社会の機能によって様々な中間や複合型があるのではないだろうか。又西洋型の個人は、税や社会保障などのシステムの中で存在しているのであり、それに適合したメンタリティも形成されている。また必ずしも歴史がたどる到達目標ではない。いずれ全体が核家族

になるというものでない。トッドが言うようにフランスの社会は不完全ではあるが、高い消費税などで支えている社会保障や連帯のようなものを作り出してきた。今まで日本では、この不在を家族が長い間埋めてきたし、今も苦勞して埋める努力をしている家族は多い。日本の社会を支えている、その直系型と平等な個人が折衷した家族が核家族に変化するというなら、その前にフランスのような社会が長い歴史を経て作り出し、維持しようとし、又作り出そうとしているものを少なくとも代価を払って作らなくてはならない。